

 KRIPTON

camera

# DVOŘÁK

String Quartets

No.12 "The American" & No.11



PANOCHA QUARTET



アントニン・ドヴォルジャーク  
**Antonín Dvořák** (1841–1904)

## 弦楽四重奏曲 第11番 ハ長調 作品61 (B.121) **String Quartet No.11 in C Major Op.61 (B.121)**

- |  |         |
|--|---------|
| ① I. <i>Allegro</i>                        | [14:30] |
| ② II. <i>Poco Adagio e molto cantabile</i> | [7:21]  |
| ③ III. <i>Scherzo: Allegro vivo</i>        | [8:33]  |
| ④ IV. <i>Finale: Vivace</i>                | [8:06]  |

## 弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 作品96 (B.179) 「アメリカ」 **String Quartet No.12 in F Major Op.96 (B.179)** “The American”

- |   |        |
|---|--------|
| ⑤ I. <i>Allegro ma non troppo</i>         | [9:01] |
| ⑥ II. <i>Lento</i>                        | [7:39] |
| ⑦ III. <i>Molto vivace</i>                | [3:54] |
| ⑧ IV. <i>Finale: Vivace ma non troppo</i> | [5:24] |

## パノハ弦楽四重奏団

イルジー・パノハ (第1ヴァイオリン)

パヴェル・ゼイファルト (第2ヴァイオリン)

ミロスラフ・セフノウトカ (ヴィオラ)

ヤロスラフ・クルハン (チェロ)

## PANOCHA QUARTET

Jiří Panocha, 1st violin

Pavel Zejfart, 2nd violin

Miroslav Sehnoutka, viola

Jaroslav Kulhan, violoncello

Recorded: April 23–26, 2002 / Modlitebna Jednoty Bratrské  
(The Chapel of The Brethren Church), Praha

録音: 2002年4月23～26日 / チェコ兄弟団教会 (プラハ)

Total Time 64:28 / STEREO

## 曲目解説 ■ J・A・フィリップス [訳=魚水 憲]

チェコの作曲家、アントニン・ドヴォルジャーク (1841～1904) は1862年から1896年にかけて、弦楽四重奏曲を14曲と、同じ楽器編成で断片、未完の作品をいくつか残しているが、これは彼が作曲家として活動したほぼ全期間にわたっている。弦楽四重奏曲は、ドヴォルジャークの室内楽を代表するジャンルであり、彼自身この分野を得意としていて、自己の思いを自由に余すところなく表現できる手段であった——この点に関しては、ベートーヴェン生涯の最後の時期における弦楽四重奏がそうである。さらに、ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲は19世紀の (その点では20世紀も同じであるが) 作曲家たちの揺るがせようのない先例となり、彼らにとっては弦楽四重奏曲は、作曲家の技量を試されるものであり、さらに技術的革新を試みるための完璧な手段でもあった。この傾向はドヴォルジャークが弦楽四重奏曲を作曲する姿勢にも明らかである。

ドヴォルジャークは、ボヘミア (現在のチェコ共和国) の小さな村に生まれ、ズロニツェとブラハで教育を受け、チェコ国民運動の指導的作曲家の1人となった。同じように国民運動を率いた作曲家では、彼の前にスメタナが、そして後にはヤナーチェクがいる。しかし、ドヴォルジャークの場合、器楽曲の作曲に関しては、一貫してその形式がオーストリア-ドイツ規範から離れることがなく、彼が一生畏敬の念を抱いて

いたハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトというウィーンの作曲家たちと同様、交響曲や室内楽曲を伝統的な4楽章構成で書いたことは、注目すべきである。それでも同時代の他の作曲家の例に漏れず、ドヴォルジャークの音楽もまた、リヒャルト・ワーグナーの影響を深く受けていて、その結果、正統的な音楽形式の持つ構造的足枷と、後期ロマン派の次第にまとまりを欠く傾向を見せる和声法と、祖国チェコの国民的色彩と叙情性を音楽の中に吹き込みたいという自身の願望という、3つのベクトル間の緊張を解きほぐすのにかなりの時間を費やした。ドヴォルジャークがたどった作曲技法の発達にとって弦楽四重奏が持っていた意義を考慮に入れると、その相反する影響の間で調和を取るのに成功した最初の作品が、1873年の終わりに書かれた弦楽四重奏曲「短調 作品12で、それ以前にこの分野で試みた作品が6曲もあることは、驚くには当たらないであろう。それ以降の弦楽四重奏曲では、いずれもこの問題に対してわずかながらそれぞれ異なった解決策を見つけ出し、特に最後の4曲 (第11番から14番まで) は、その1曲、1曲が独自の意義を持つ傑作となっている。

「弦楽四重奏曲 第11番 ハ長調 作品61 (B.121)」は、オペラ「ディミトリ」の作曲と同時進行で、ウィーンのヘルメスベルガー弦楽四重奏団のために書かれ、1881年11月の初めに完成された。しかし、初演は

翌年の11月、ベルリンでヨアヒム弦楽四重奏団によっておこなわれている。この作品では国民主義的要素が果たしている役割は少ないが、それは、予定していたウィーンの聴衆を考慮に入れていることであつたと思われる。当時のウィーンの聴衆にとって、チェコの国民運動は単なる音楽美学上の問題として片づけることはできなかったのである。それ故に、この対位法を豊かに用いた作品がいっそう意味を持つのはウィーン古典派とワーグナーの影響である。それは第1楽章の冒頭からすぐに聞き取れる。最初のクレッシェンドでは、ワーグナー風の楽句が重なりあい、その中で旋律の断片が積み重なって主旋律のフォルティッシモを形成する。これはロマン派の作曲家がベートーヴェンの交響曲 第9番の冒頭から借用して使った典型的な技法である。第1主題は、各声部間の対位法的な処理の機会を十分に与えるものとなっていて、ドヴォルジャークは展開部でそれを大いに活用している。一方第2主題のゆったりと半音階的進行は、ワーグナーさえもかすんでしまいそうなのである。ボコ・アダージョ・エ・モルト・カンタービレの第2楽章は「ヴァイオリン・ソナタ 作品57」の草稿から題材を取っている。構造は歌謡形式の一種 (ABCDAB) をとり、2つの対照的な楽想——最初に叙情的な楽想と、次に断固とした厳しい楽想——で始まる。シンコーペーションが豊かに使われている伴奏は、繰り返さ

れるときにはさらに変化に富む。スケルツォ (アレグロ・ヴィーヴォ) は第1楽章のモチーフを再び用いて、緻密なポリリズムと印象的な魔法和声法が特徴となっている。長めのトリオの部分で、初めてチェコ風の色彩が旋律となって姿を現す。そして曲を締めくくる最終楽章のヴィヴァーチェではチェコの舞曲の要素と複雑な対位法が、和声、リズムの豊かさ、叙情性と相まって、比類のないほどのすばらしい効果を上げている。

「弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 作品96 (B.179)」は、その姉妹編である「弦楽五重奏曲 変ホ長調 作品97」と共に「アメリカ」という副題がつけられている。両作品とも、ドヴォルジャークの最初のアメリカ滞在中の1893年に書かれている (「ヴァイオリン・ソナタ 作品100」の作曲もこのときである)。作品96は3日間 (6月8日から10日) という驚くべき短期間にスケッチが終わり、スコアも同月の23日に、スピルヴィルというアイオワ州の村で過ごした夏期休暇の間に完成された。初演は1894年1月、マサチューセッツ州ボストンで、クナイゼル弦楽四重奏団によっておこなわれた。おそらくドヴォルジャークの弦楽四重奏曲の中でも最も人気があるこの曲は、単純明快で平明過ぎるとさえ言えるかも知れないが、それでも、その独創性と新鮮さ、魅力は時を超えて人の心を捉えるものを持っている。ここでは、ドヴォルジャークがチェコの民俗音楽から受け継いだものと、新世界で遭遇した音楽が見事に統合され、

多くの実を結んでいる。この作品はドヴォルジャークの弦楽四重奏曲の中でもっとも統一のとれたもので、その主題のほとんどがペンタトニック音階——特にC、D、F——によっている。第1楽章 (アレグロ・マ・ノン・トロポ) の冒頭はスメタナの弦楽四重奏曲 第1番へのオマージュである。第2楽章のレントは、魔法和声と上昇するヴァイオリンの旋律が、彼の書いた作品の中でも最も心からあふれ出てきた音楽の1つとなっていて、彼の緩徐楽章のなかで最も有名なものの1つでもある。スケルツォ (モルト・ヴィヴァーチェ) は、鳥の声 (アカフキンチョウの鳴き声) で始まるが、この鳥の声を、ドヴォルジャークはスピルヴィルに着いた最初の日に聞いたと言われている。このスケルツォは、それよりも遙かに長いトリオの幕開けに過ぎない。作品を締めくくるのはヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロポである。楽章の途中で出てくるメロ・モットと記された楽句では、ドヴォルジャークがスピルヴィルで弾いた教会の小さなオルガンの響きが聞こえてくるようである。



## プロデューサー・ノート ■井阪 紘

1998年、パノハ弦楽四重奏団は初めて草津音楽アカデミー&フェスティバルに参加した。その8月24日のポピュラー・コンサートで、ドヴォルジャークの第12番の弦楽四重奏曲「アメリカ」を弾いた。それは、一服の清涼剤のように爽やかな演奏で、私は感心して聴いたのを憶えている。

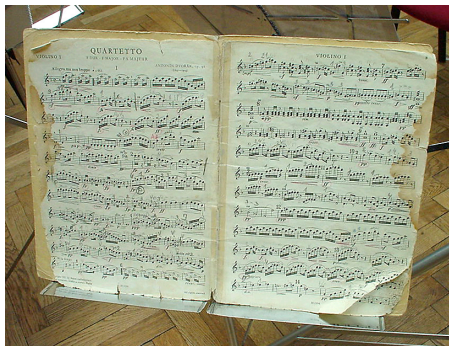
その時の彼らは決してボヘミアの哀愁を強く表に出す、といった演奏ではなく、あくまでも、作品に書かれている表情を素直に弾いて、嫌味がなく、作品そのものに語らせるかのようで好感を持った。第1ヴァイオリンのパノハの演奏は、決して大きな素振りを見せない。清楚で、もともとフォルテとピアノのダイナミックの差を強調するような演奏を好まないようで、自分の歌を大切にしていけるタイプ。にもかかわらず、他の3人は彼のメロディーを浮かび上がらせるに絶妙のサポートで、パノハがピアノシモに落とすと、3人も信じられないような弱音でそれを支える。音楽はどの瞬間にも、陰影が明確で旋律が聴き手の心に直接訴えかけてくるように響く。久し振りによい音楽を聴いたなあと、客席で満足した。

パノハ弦楽四重奏団は、共産圏の時代から専らスブラフォン・レーベルに専属的に録音活動を行っており、ドヴォルジャークに関しては、初期のあの長大な習作を含めて、全曲を10数年にわたってレコーディングして、それは日本でもスメタナ弦楽四重奏団の

後を継ぐものとして高い評価を得ていた。私が彼らの録音活動に関して手を出す必要は何一つないと傍観していた時代もあったので、吉田恵美子さんとおっしゃる熱心なパノハ弦楽四重奏団のファンの方が、このグループを私に録音させたくて是非にと紹介し、会わせてくださらなければ、今日の関係はなかった。草津の音楽祭への出演は、その最初の出会いだった。

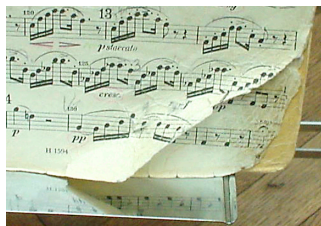
そうしている内に、日本での演奏活動をも私たちが全面的にサポートするようになり、レコーディングもスメタナの2曲の弦楽四重奏曲から徐々に始めようということになって、2002年には今回の2曲のドヴォルジャーク（スブラフォンに録音して以来、すでに20年以上が経っている）、次いで発売は逆になったが、アントン・ライヒャの2曲の五重奏曲の2枚を録音した。

今回の録音は、彼らが住んでいる街のブラハを録音場所に選んだが、スメタナの2曲を録った市内にある教会は、近くが工事中で使用できず、郊外（と言っても市内だが）のビルの中にあるモダンな教会を借りて、丸4日間を、ゆったりとしたスケジュールで録った。恐らく1000回以上もコンサートで弾いて来ただろう「アメリカ」のようなポピュラー名曲、自家薬籠中で、あっという間に録音が完了するのでは……と想像していた作品に、思いのほか手こずった。というよりは、楽譜を改めて見直した。ダイナミックやフォルツァンド、アクセント、スラー、すべてを書かれてある姿に



▲レコーディングで使用されたイルジー・パノハ（第1ヴァイオリン）のパート譜。

▼長い間弾きこまれ、ページの右端が破れてしまっている。



現すには、あまりにも、彼らはすでに自分たちのスタイル、演奏が身につき、出来上がりすぎていたと言うことかもしれない。私の細かい指摘に、改めてパート譜ではなく、スコアを全員が眺めて、ドヴォルジャークの表わそうとした原点に戻る。そこから再び自分たちの演奏を組み立てなおす。その作業に、ずいぶん多くの時間を使った。

パノハの使っているパート譜を見れば、それが一目瞭然、よくわかる。第1楽章の最初のページの右下は、ページを1000回以上も繰っている内に、もうすでにすりへった紙がさらにちぎれて、最後の小節の音符がなくなっている。言うならば、パノハのメンバーにとっては、恐らく「アメリカ」は、パート譜なしの暗譜でも演奏できる——そんな、音楽と肉体とが密着

して一体化したような関係にまで来ているのだ。その関係を、私がもう一度解きほぐすことから始めたから、時間がかかった。

でも結果は、スブラフォン時代の彼らとはまったく違った、より高い地点の「アメリカ」が完成したと自負している。

ドヴォルジャークは生前に、自分の弦楽四重奏曲として発表したのは作品80から作品106までと言われている。我々がこれらの作品全曲をウィーン弦楽四重奏団で録音する予定は、道中途で中断している。ひょっとするとパノハ弦楽四重奏団の方が、この作品集を早く完結させるかもしれないし、また、彼らの新録音への期待は大きい。

## プロフィール



### ●パノハ弦楽四重奏団

パノハ弦楽四重奏団は弦楽器王国ともいえるべきチェコの誇る、代表的な弦楽四重奏団である。往年のスメタナ弦楽四重奏団の育ての親、ヨゼフ・ミツカ教授の弟子達によって結成され、1971年に正式に活動を開始した。以後1975年のブラハでの国際弦楽四重奏コンクールにおいての優勝を皮切りに、ヨーロッパ全土、またアメリカ、カナダ、日本、イスラエルほかにおいても定期的に演奏会を行い、エジンバラ、ザルツブルク、ブラハ等の国際フェスティバルに参加している。

録音にも積極的で、そのレコードは多くの賞を受賞。特に1983年にはマルティヌーの弦楽四重奏曲第4番、第6番の録音に対してパリでアカデミーシャルル十字勲章を受賞している。ドヴォルジャーク、スメタナ、マルティヌー、ヤナーチェクなどのチェコの音楽に重点をおいて活動しているが、広範囲にわたる彼らのレパートリーにはハイドン、モーツァルト等のウィーン古典派やロマン派の作品、そしてバルトーク、ショスタコーヴィチといった近・現代の作曲家までも含まれる。

パノハ弦楽四重奏団は現代の世界の有力カルテットの多くと同様、切れ味のよいアンサンブルの呼吸の持ち主であるが、その響きには現代風の冷たいタッチとは一線を画し、ボヘミア独特の練り絹の手触りとも言える、曰く言い難いしなやかな感触があるのが大きな特徴である。1980年に初来日し、その後も来日をつけ、近年では草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルに毎年出演。舞台上に上るたび、完璧な技巧と温かみ溢れる音色で聴衆を魅了している。

### ■イェルジー・パノハ(第1ヴァイオリン)

1950年、クラドノ生まれ。8歳よりヴァイオリンを始め、はやくも10歳でオーケストラと共演してデビュー。12歳でプラティスラヴァの青年創作活動コンク

ルに優勝、翌年からミツカ教授に師事。1966年から1972年までブラハ音楽院に在学。はじめに三重奏団を結成したが、1968年にパノハ弦楽四重奏団を結成。独奏者としては1969年のチェコ文化省主催独立50周年記念コンクールに優勝し、国内外で多くのリサイタルを行った。さらにブラハ音楽院学生室内オーケストラのコンサート・マスターとしても卓抜な才覚を示し、1972年に西ドイツで行われたカラヤン主宰の室内オーケストラのコンクールで第1位金賞を獲得、さらにカラヤンの指揮のもとに行われたコンサート・マスターのコンクールでも優勝した。1972年からブラハ音楽アカデミーでスメタナ弦楽四重奏団のアントニン・コホウトに師事。研鑽を重ねる。

### ■バヴェル・ゼイファルト(第2ヴァイオリン)

1952年、ブラハ生まれ。2歳の頃から天才的な音楽性をあらわし、歌を楽しみながら、音楽学校のピアノ・クラスに入学。あるとき聴いたパノハのヴァイオリンに衝撃を受けて、11歳でヴァイオリンを始め、1967年から1972年までブラハ音楽院に在学、パノハと同じくチャベク、ミツカ教授に師事し、1968年からパノハ弦楽四重奏団に参加、1972年から1977年までブラハ音楽アカデミーで学ぶ。多才なゼイファルトは13歳でテレビ番組の主演を演じたが、パノハの三重

奏団が弦楽四重奏団に拡大されるとき、ミツカ教授の説得で第2ヴァイオリン奏者となり、現在に至っている。

### ■ミロスラフ・セフノウトカ(ヴィオラ)

1952年、ブラハ生まれ。7歳からヴァイオリンを始め。その後ミツカ教授の勧めでヴィオラを始め、普通中学・高校に通いながらボミール・マリー教授に師事。卒業後、1970年から1977年までブラハ音楽アカデミーでスメタナ弦楽四重奏団のミラン・シュカンパに師事。病気で辞めたフルージュの後を受けて、1971年以来パノハ弦楽四重奏団の一員となった。

### ■ヤロスラフ・クールハン(チェロ)

1950年、チェスケー・ブジェヨビツェ生まれ。11歳から本格的に音楽を学ぶ。R.ビーザにチェロの手ほどきを受けた後、1966年からブラハ音楽院で学ぶ。在学中は、室内オーケストラのソロ・チェリストとして活躍し、1968年からパノハ弦楽四重奏団に参加、1972年からはブラハ音楽アカデミーに進む。チェコ・フィルのヨセフ・ネコラのもとで室内楽を学び、ブラハ音楽院、音楽アカデミーを通じてヨセフ・フッフロに師事した。

The Czech composer Antonin Dvořák (1841–1904) left in all some fourteen works in the string quartet genre along with a number of fragmentary and unfinished compositions, written over the span of almost his entire compositional career, from 1862 to 1896. The medium is Dvořák's best represented chamber music genre, one in which he obviously felt at home and which provided him with a natural and uninhibited vehicle for the expression of his ideas—much as it did for Beethoven in the last years of his life. Beethoven's late quartets, moreover, created a precedent for nineteenth- (and twentieth-) century composers, who came to see the writing of string quartets as a touchstone of compositional technique and a perfect vehicle for technical innovation. These tendencies are well represented by Dvořák's quartet output. Born in a small village in Bohemia (now the Czech Republic) and educated in Zlonice and Prague, Dvořák became one of the leading composers of the Czech nationalist movement, along with Smetana before him and Janáček after him. Yet it is significant that, throughout his instrumental output, he subscribed almost unquestioningly to the formal tenets of the Austro-German canon, writing traditionally structured four-movement symphonies and chamber works like the Viennese composers for whom he maintained a lifelong admiration—Haydn, Mozart, Beethoven and Schubert. Yet, like so many other composers living at the time, Dvořák's music was also profoundly influenced by that of Richard Wagner, and Dvořák took some time to resolve the tension between the apparently restrictive structures of orthodox musical forms, the discursive tendencies of late Romantic harmony and his own desire to imbue his music with the national color and lyricism of his Czech homeland—a musical tradition with unique dance forms (notably the *dumka* and *furiant*) and melodic and rhythmic characteristics quite at odds with those of Viennese instrumental

music. Given the significance of the string quartet for Dvořák's compositional development, it is not surprising that the work that first found its way toward a successful balance between these opposing influences was the A minor Quartet, Op. 12, composed in late 1873—his sixth essay in the quartet genre. Each of the quartets that followed was to find a slightly different solution to this problem, and the last four quartets in particular (Nos. 11–14) are fully-fledged masterpieces in their own unique way. The String Quartet No. 11 in C major, Op. 61 (B. 121) was written for the Viennese Hellmesberger Quartet while Dvořák was engaged on the composition on his opera *Dimitrij*, and completed in early November 1881, but in fact it was premiered in Berlin by the Joachim quartet in November the following year. Nationalist elements play a limited role in this work, perhaps in view of the Viennese audience for which it was written, for whom Czech nationalism was far from being merely a question of musical aesthetics. All the more significant in this richly contrapuntal work are the influences of the Viennese classics and of Wagner. One can immediately hear, at the outset of the first movement, overtones of many a Wagnerian passage in the opening crescendo, in which melodic fragments build into a fortissimo statement of the main theme—a characteristic Romantic technique borrowed from the opening of Beethoven's Ninth Symphony. The principal theme itself affords ample opportunity for contrapuntal interplay between the parts, as Dvořák reveals in the development section, while the strikingly chromatic second subject meanders through territory in which even Wagner seems to have been left behind. The second movement, *Poco Adagio e molto cantabile*, uses material originally drafted for the Op. 57 Violin Sonata. It is cast in a variant of song form (ABCDB), beginning with two principal ideas, the first lyrical, the second angular and severe. The richly

syncopated accompaniment of the main themes is varied on their return. The Scherzo (*Allegro vivo*) recycles a motive from the first movement and features elaborate cross-rhythms as well as a passage of strikingly modal harmonies. Czech melodic coloration is introduced for the first time in the lengthy Trio, and Czech dance elements as well as elaborate counterpoint characterize the Vivace that forms an exceptionally fine conclusion to this work, as rich lyrically as it is in harmonic and rhythmic resource. The String Quartet No. 12 in F major, Op. 96 (B. 179), is often subtitled “The American” along with its sister-work, the String Quintet in E flat major, Op. 97. Both works (along with the Violin Sonata, Op. 100), were written in 1893 during Dvořák's first sojourn in the USA; Op. 96 was sketched in the remarkably short space of three days, from 8 to 10 June, the score completed on 23 June, during the composer's idyllic summer holiday in the lowland village of Spillville. It was first performed in Boston, Massachusetts, by the Kneisel quartet in January 1894. Perhaps the most popular of Dvořák's quartets, the work is straightforward, even simplistic, yet has a spontaneity, freshness and charm that have stood the test of time. Dvořák's Czech folk music heritage seems here to have entered into a fruitful marriage with the music he encountered in the New World. It is also the most unified of Dvořák's quartets, almost all of its themes featuring pentatonic scales, especially the notes C, D and F. The opening of the first movement (*Allegro ma non troppo*) pays homage to Smetana's first quartet. The Lento, with its modal harmonies and soaring violin line, is among the most heartfelt music Dvořák ever wrote, and among the most famous of his slow movements. The Scherzo (*Molto vivace*) begins with what is said to be a bird call (that of a scarlet tanager) heard by Dvořák on his first day in Spillville; the Scherzo proper, however, forms merely a curtain-raiser to the far

longer Trio. The work concludes with a bustling Vivace *ma non troppo*, in which, in a passage marked *Meno mosso* about half way through the movement, echoes may be heard of the little church organ which Dvořák played at Spillville.

©2003 by John A. Phillips, Adelaide

## Panocha Quartet

The Panocha Quartet was formed in 1968 by students of the Prague Conservatory. Their first great success came in 1975 at the International String Quartet Competition in Prague, where they were nominated as laureates of Competition. Quartet has performed regularly in nearly every country of Europe, as well as overseas. Since 1975 the Quartet has been twenty-five times to the USA and Canada, as well as playing also in New Zealand, Australia, Japan, Israel, Mexico and elsewhere. The Quartet has participated in prominent international festivals, such as Edinburgh, Salzburg, Prague, Menton, Dubrovnik, Tel Aviv, Kuhmo and Mondsee. It was awarded the Gold Medal in Bordeaux (1976) and the Gold Disc of Supraphon (1982). In 1983 was received the Grand Prix Academie Charles Cros in Paris for its recording of Bohuslav Martinů's Quartets Nos. 4 and 6. The Quartet places particular emphasis on Czech music, especially the works of Dvořák, Smetana, Martinů and Janáček. The Panocha Quartet's extensive repertoire includes many Viennese classics, particularly the quartets of Joseph Haydn. Equally the Quartet's programs often include the great Romantic quartets, as well as those of twentieth century masters such as Bartók and Shostakowitch. The Quartet has made many recordings on the Supraphon label. In the last years they finished the completion of all the chamber music works of Antonín Dvořák, they also played number of concerts

with pianist, Andras Schiff. Their recordings of Dvořák's quartet No. 10 "Slavonic" and The Cypresses were awarded the MIDEM Cannes Classical Awards. At the present they are completing recordings of all the chamber music of another Czech composer, Zdeněk Fibich. The Panocha Quartet toured extensively in USA, Ireland, Great Britain, Spain, Italy, Germany, the Netherlands, Belgium and Austria. The Panocha Quartet has already joined by the Czech (Bohemian) Quartet and continued by the Smetana, Janáček and Vlach Quartet.

#### **Jiří Panocha** | 1st violin

Comes from Kladno where he was born in 1950. He began playing the violin at the age of eight. Later, he attended the Conservatory and the Academy of Performing Arts in Prague under professors Josef Micka and Jiří Novák, 1st violin of the famous Smetana Quartet. He took part in international courses (weimar) under outstanding violinists. During his studies, he also participated in several Czechoslovak competitions (1970—competition of the Czech Ministry of Culture. The following year in the international contest of the 1971 Prague Spring Festival, he won the third prize and title of laureate). He devoted his life to The Panocha Quartet since 1968. He is the founder of this quartet. He plays an Italian violin C. A. Testore (1743).

#### **Pavel Zejfart** | 2nd violin

Born in 1952 in Prague. He studied violin at the Conservatory and the Academy of Performing Arts in Prague under professors Josef Micka and Nora Grumlíková. As a child he began playing the piano and to sing. During his childhood he also was the movie actor. He has been a member of The Panocha Quartet since 1968, and has toured and recorded with the quartet extensively in many countries. He plays a violin, Joseph Klotz (1807).

#### **Miroslav Sehnoutka** | viola

Born in 1952. He studied viola at the Prague Academy of Performing Arts under Milan Škampa, the distinguished viola of the Smetana Quartet. He has been a member of The Panocha Quartet since 1971 and has toured with the quartet on many visits to the USA, Canada, Australia, Japan and most European countries. He plays an Italian instrument, Giuseppe Dall' Aglio (1773).

#### **Jaroslav Kulhan** | violoncello

Born in 1950, comes from České Budějovice where he also took up the cello. In 1972, He graduated from the Prague Conservatory under Prof. Josef Chuchro. He continued his studies at the Prague Academy of Performing Arts under the same professor. Since 1968 he has been a member of The Panocha Quartet with which he has performed many concerts and made a considerable number of recordings for Spraphon, Panton, Denon and Teldec. He plays an Italian instrument, Aloysius Marconcini (1787).



**Recording Producer:** Hiroshi Isaka  
**Recording Engineer:** Yasuhisa Takashima  
**Editing:** Motoki Miyata

**Recording Date:** April 23–26, 2002  
**Recording Location:** Modlitebna Jednoty Bratrské  
(The Chapel of The Brethern Church), Praha

**Photograph:** Hiroshi Isaka  
**Cover Art:** View of the Lesser Town and Hradčany (1825)  
by Vincenc Morstadt (1802–75)  
**Cover Design:** Yoshihiro O'hara

**Technical Information**

**Microphone:** SCHOEPS CMC-52SU x 2 (one point)  
**Mixing Console:** STUDER 169  
**A/D Converter:** WADIA WA-4000  
**Recording Deck:** SONY PCM-2700A (DAT)  
**Monitor Amplifier:** JVC AX-437  
**Monitor Speaker:** JVC SP-M33BK  
**Editing and Mastering System:** SONIC SOLUTIONS "SONIC STUDIO HD"

**Special Thanks:** Kazuie Sugimoto (JVC Mastering Center)

\*文章は初版のCDブックレットから一部補筆のうえ転載しました。



